

漁況海況予報事業（情報交換推進事業）

本永文彦、石垣悦子、具志堅まさみ
天久尊哉、徳元晴美

1. 目的及び内容

沿岸、沖合漁業に関する漁海況の調査、研究および資源調査の結果に基づいて、海況の変動や漁場の形成される位置、魚群の量などの予報文を作成する。さらに、漁海況情報を収集し漁業者に通報することにより、漁業資源の合理的利用と操業の効率化を図り、漁業経営の安定に資する。また、海況や資源の状態などあらゆる情報から、漁況あるいは資源の変動を予測する手法を開発改良し、予報の精度を高める。

本事業を実施するにあたり、毎月の漁獲記録が保存されたフロッピーディスクや、漁獲量集計に必要なセリ帳を提供していただいた関係漁協には厚くお礼申し上げます。

2. 方法

漁海況情報、予報文の作成 曳縄（主にパヤオ）やかつお竿釣り、トビロープ、とびいか釣りなどの各地の漁獲状況について、1カ月に1度、漁協別魚種別漁獲量を整理し、“漁海況情報”を作成し水産関係者へ広報する。本年度は、昨年が続いて市場情報収集解析システムがまだ完成していないため、各漁協で作成した魚種別漁獲量を漁獲資料として用いた。

また、かつお漁の初漁時期となる6～7月には沖縄島北西と宮古島での漁況予測をし、漁期全般の漁模様についての情報を関係漁協に通報する。

生物情報の収集

市場体長測定・・・定置網の重要漁獲物を対象に月10日程度（7月まで）。

銘柄別漁獲量・・・カツオやキハダ、クロカジキ、とびうお類の魚体重量や銘柄別漁獲重量。

市場情報の収集 販売業務（セリ帳集計）にオフィスコンピュータ（オフコン）を導入している漁業組合を対象に毎日の販売データをフロッピーディスク（FD）に保存してもらい、それを漁獲統計の資料としている。これは、1989年1月以降実施している。また、オフコンを持たない漁業組合については、水産試験場でパソコンにより集計する。

3. 結果

市場情報の収集 現在までの作業経過については、“市場情報収集解析システムの開発”で記した。

*非常勤職員

1989年の漁況の経過

①かつお釣り 沖縄周辺海域におけるかつお釣り漁獲量は、近年低調で推移している。1989年漁期は本部で好調であったが、宮古・八重山で低調であった。宮古では例年通り7～8月に盛漁期であったが大型群の漁獲少なく低調。八重山では昨年7月に好漁した木付群からの漁獲少なく、瀬付き群とバヤオでの漁獲で低調。各海域とも漁獲集計の作業が遅れておりその詳細については不明であるが、聞き取りによると上記のとおりである。

②バヤオ利用漁業 県内全域へと普及した1985年以降年々漁獲量は増加し、沖縄県沿岸での基幹漁業といわれるまでに発展している。当水試調査の7漁協合計の漁獲量は、1985年 679トン、1986年 786トン、1987年 968トン、1988年 1,286トン、1989年 1,600トン（概数值）であり、ここ5年間の漁獲量は毎年増加した。昨年と比べ、カツオとシイラが若干減少した他は順調に漁獲が増えた。キハダ：沖縄島南東海域では年々漁獲が増加している（図2）。春季漁3～5月のキハダ（10kg以上）は、前年より減少したがまずまずの漁獲であった。秋季漁の9～11月は、同時期として近年で過去最高の漁獲があった（図3）。一方、宮古島では例年どおり7～10月に漁獲があり好漁であった。沖縄島南東では毎年順調に漁獲が伸びているが、宮古島ではこれまで隔年変動がみられ、1年毎に好漁、不漁を繰り返している（図2）。宮古島でのキハダ漁獲は、初漁時期と漁模様とに正の相関がみられており（本永1990）、初漁の早かった1989年漁期は期待どおり好漁となった。

クロカジキ：沖縄島南東と与那国島ともに1988年は近年にない不漁であった。この不漁は与那国島、沖縄島、奄美大島の各島で共通したため、地域的な不漁現象ではなく、沖縄近海への回遊量が少なかったことが第一の要因と考えられた。しかしその回遊量の変動要因が不明なため、次年度にクロカジキの回遊は回復するのかまったく予測できない。そのため1989年漁期は、各地とも期待と不安のままカジキ漁がスタートすることになったが、結果は沖縄島南東で好漁、与那国島で平年をやや下回る漁であった。

シイラ：過去4年間漁獲は年々増加していたが、1989年漁期は前年並の漁獲であった。漁期は春季と秋季であり、いずれも前年並の漁獲であった。漁獲量が沖縄近海での回遊量を表現していると仮定すれば、シイラ資源の増加はこの辺りが上限なのかもしれない。この5年間の漁獲をみていると、本種の漁獲変動はカツオやキハダに比べ穏やかであり、生物情報や漁業情報が永続して収集できれば、今後の資源評価研究へと役立つと思える。

③とびいか釣り 近年、漁業従事者の高齢化と減少で漁獲は少ない。1989年漁期は、8月末の台風17号通過後に1隻平均の漁獲が150kgを上回り、1986年並の好漁年。

4. 要約

1. 各地の漁獲状況や海水温情報を収集し、“漁海況情報”を作成、広報した。
2. かつお釣り漁業は近年低調で推移し、1989年漁期は本部船で“好調”、宮古・八重山船が“低調”であった。
3. バヤオ利用漁業による漁獲は、1985年に全県へ普及して以来年々増加している。各魚種の漁獲は、前年に比べカツオとシイラが若干減少した他は、好調であった。
4. とびいか釣りの漁獲は、近年少ない。C P U Eでみれば1986年並の好漁年であるが、漁獲量はさほど増えなかった。

5. 参考文献

本永文彦 (1990) : 沖縄県パヤオ利用漁業における主要魚種の漁況の経過 (1985-1988). 南西外海の資源・海洋研究、6、27-39.

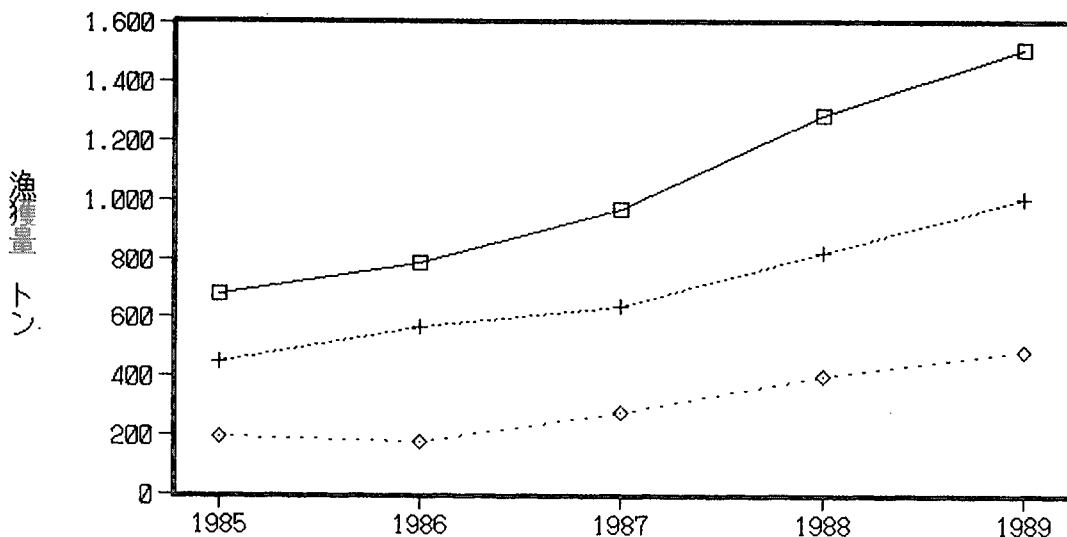


図1 小型曳網船漁獲量の経年変化
主要7漁協合計、+ 沖縄島南東、宮古島

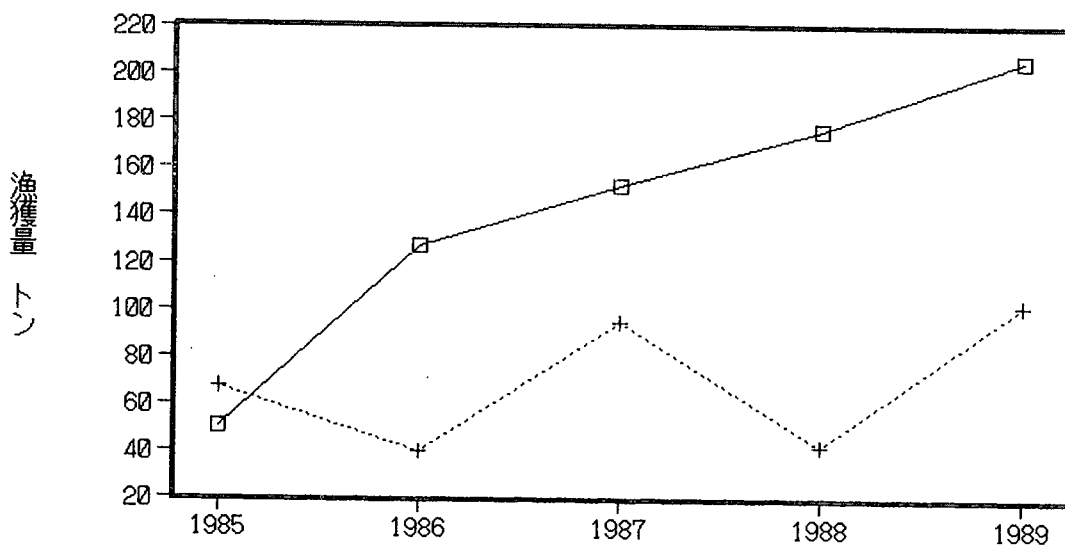


図2 キハダ (10kg以上) 漁獲の経年変化
沖縄島南東5漁協、+ 宮古島伊良部漁協

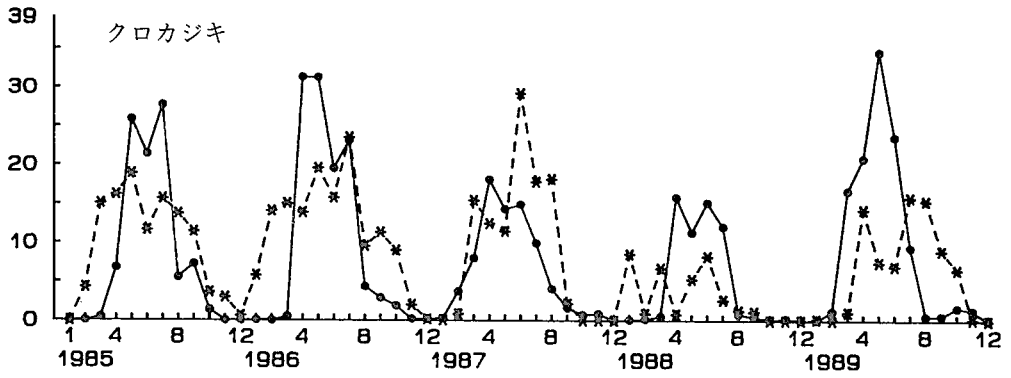
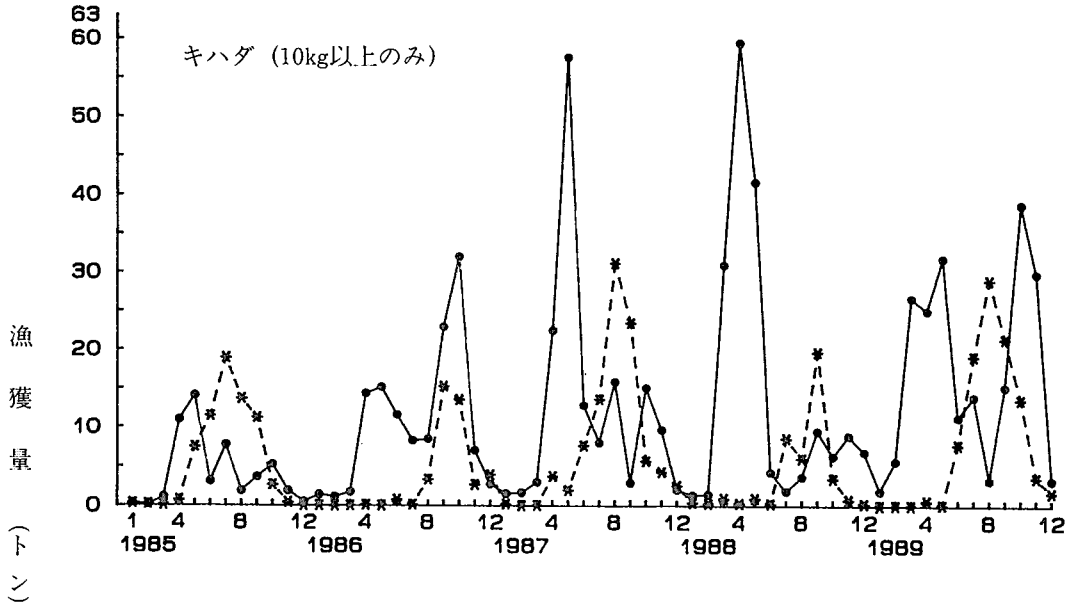


図3 小型曳網船漁獲量の月別変化

○沖縄島南部5漁協、*宮古島伊良部漁協

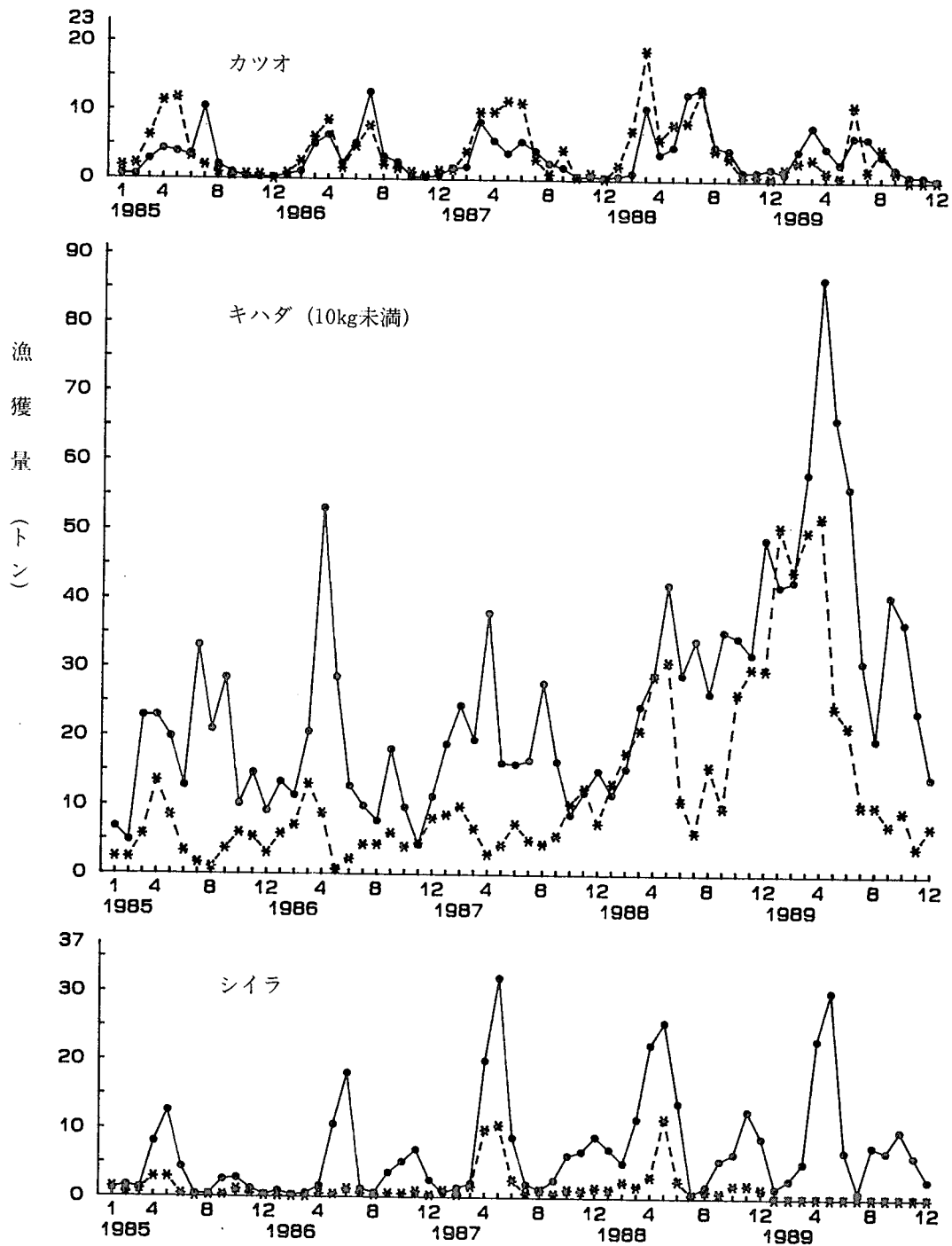


図3 小型曳縄船漁獲量の月別変化(続き)

○沖縄島南部5漁協、*宮古島伊良部漁協